

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22401027

研究課題名(和文)中国福建省浦城県南部のびん北区方言に関する調査研究

研究課題名(英文)Research on the Minbei dialects of southern Pucheng, Fujian, China

研究代表者

秋谷 裕幸 (AKITANI, Hiroyuki)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：10263964

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：四年間の研究期間中、中国福建省浦城県南部のびん語びん北区方言群に属する、山下方言、臨江方言、観前方言、水北街方言、楓溪方言、および浦城県北部の呉語仙陽方言の調査を行った。調査項目は私がこれまでに公刊してきた『びん北区三県市方言研究』等と同一である。当初調査を予定していた小溪方言に代えて楓溪方言を調査するなどの変更はあったが、現地調査はほぼ当初の計画通りに進めた。調査データの入力作業も進めたが、平成二十六年六月一日現在、楓溪方言のデータ入力は未完成である。本研究課題の最終目標であった調査報告書『浦城県境内びん北区方言研究』(中国語)の初稿完成が研究期間内に達成できなかったことを遺憾とする。

研究成果の概要(英文)：I researched five Minbei dialects of Pucheng prefecture, Fujian, China, i.e. (1) Shanxia dialect, (2) Linjiang dialect, (3) Guanqian dialect, (4) Shuibei jie dialect, (5) Fengxi dialect. I researched Xianyang dialect of Wu too. The questionnaire which I used is the same as the one which I used in the Research on the three Minbei dialects (2008). Field researches has done as the original schedule successfully. I entered the all data except Fengxi dialect into the computer also. I have planned to finish a field report, Research on the Minbei dialects of Pucheng, Fujian, China originally, but it have not finished yet.

研究分野：人文学A

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：国際情報交換 中国語 浦城県 びん語 びん北語 フィールドワーク

## 1. 研究開始当初の背景

「門構え+虫」がインターネット上で入力できないので、本研究成果報告書では一律ひらがなで「びん」と記す。

(1) びん語びん北區方言群は、Jerry Norman・李如龍両教授の多年にわたる研究により、その全体像がすでにおおむね明らかになっている。そのなかで、福建省浦城県南部に分布するびん北區諸方言とりわけ石陂鎮以北の方言は、建陽市黄坑方言および南平市延平区夏道方言と並びもっとも特異なびん北區方言である。

(2) 浦城県南部のびん北區方言は、鄭張尚芳《浦城方言的南北区分》(《方言》1985年第1期)において、きわめて簡単ではあるが、初めて報告された。ついで李如龍《浦城県内的方言》(陳章太・李如龍《びん語研究》1991年、語文出版社)が臨江方言と石陂方言をやや詳しく記述した。

(3) 私自身も1990年以降、びん北區方言の調査を継続的に行い、浦城県石陂方言に関する詳細なデータをも含む《びん北區三県市方言研究》を著し、石陂方言についてはそれがごく平均的なびん北區方言であることを示した。またこの著書において、臨江、観前二方言についても私自身が調査した簡略なデータに基づき若干の検討を加えた。しかしながら、それらが他のびん北區諸方言とあまりにもかけ離れているため、また体系的なデータが存在しないため、詳細な検討は別の機会に譲らざるを得なかった。

## 2. 研究の目的

びん語びん北區方言群に属する中国福建省浦城県(1) 山下方言、(2) 小溪方言、(3) 臨江方言、(4) 観前方言、及び呉語処衢方言群に属する(5) 仙陽方言の現地調査を行い、調査報告《浦城県境内びん北區方言研究》(中国語で執筆)の初稿を研究期間内に完成させる。

なお、研究の過程で小溪方言に代えて楓溪方言を調査し、また水北街方言を追加で調査することとなった。

## 3. 研究の方法

本研究は、フィールドワークによってびん北區方言のデータを収集することを最大の目的としている。調査内容は以下の通り。

(1) 中国社会科学院編《方言調査字表》を用いた字音調査。およびその結果に基づく、音韻体系の暫定的な帰納。

(2) 変調(tone sandhi)のある方言については(1)の結果に基づくその規則の暫定的帰納。

(3) 語彙調査。調査報告の語彙対照に掲載する600語。それに加え、同音字表の充実および調査報告“3.1 語彙特徴”執筆のために3000語前後を調査する。

(4) 例文調査。調査報告の例文対象に掲載する100例文。それに加え、調査報告“4.1 文法特徴”執筆のために200例文語前後を調査する。

(5) 以上すべてに基づく音韻体系(および存在する場合には変調規則)の帰納。

## 4. 研究成果

ここでは調査した五地点の浦城県びん北區方言、山下方言、臨江方言、観前方言、水北街方言、楓溪方言の主たる音韻特徴を記述して、成果報告に代えたいと思う。

この五方言は大きく三種類に分類することができる。

(1) 山下方言、臨江方言、観前方言。この三方言こそが、他のびん北區方言群と著しく異なる、きわめて特異なびん北區方言である。びん北區方言群の顕著な音韻特徴として、中古全濁平声、上声、去声、入声が不規則に分裂する現象を挙げることができる。山下等三方言にもこの現象が観察される。問題は全濁平声にある。この三方言では声母が無声有気音に変化するものおよび少数の摩擦音声母をもつものがいわゆる「陽平甲」をもつ以外は、すべて「陽平乙」となっている。臨江方言の例を挙げると、無声有気閉鎖音あるいは破擦音声母をもつ「啼(泣く)」「頭」「糖」「前」「治(殺す)」「虫」「槌」「床(ベッド)」「浮き草」「環(輪)」、および摩擦音声母をもつ「時」「横」「尋(両腕を広げた長さ)」がいわゆる陽平甲に相当する陰去[33]で発音される以外は、全濁平声はすべて陽平乙に相当する陽平[22]で発音される。「爬(はう)」「銭(お金)」「茶」「皮」のようにびん北區方言群では通常陽平甲で発音される語も陽平[22]で発音される。要するに臨江方言では、無声無気音声母を条件として、陽平甲>陽平乙の推移が生じたと推定される。山下方言と観前方言もこの特徴を示す。この点に基づき、山下、臨江、観前の三方言を、びん北區方言群における一下位グループとみなすことができよう。ちなみにびん語邵将区方言群では「啼(泣く)」「頭」「糖」「虫」「槌」「床(ベッド)」「浮き草」「横」などが他の全濁平声と異なった調類をもっている。この現象は長らく議論の対象となってきた。山下、臨江、観前三方言のデータから得た知見によるならば、邵将区方言群でもやはり無声無気音声母を条件とす

る陽平甲>陽平乙の推移が生じたと推定されよう。浦城県と邵将方言群が分布する地域は地理的に大きく隔たっているため、両者でそれぞれ独自に同じ変化を起こしたのである。この問題はびん語音韻史全体に関わる重要な問題と考えられるので、論文を執筆した。本研究報告書「5.主な発表論文等」[雑誌論文]を参照してほしい。

他のびん北区方言には観察されない特徴は陽平甲>陽平乙の推移ばかりではない。びん北区方言群では全濁去声のうち「大」「豆」「樹(木)」「病」「汗」は一般に同じ調類で発音される。臨江方言ではこれらが清去声由来の語と同じ調類で発音される。例えば「病」と「柄」がこれら三方では同音となる。この特徴をもつびん北区方言は今のところ他に知られていない。

また臨江方言では全濁上声(閉鎖音、破擦音)が一律無声有気音化する。例えば「白」「掘(掘る)」「石」「薄」「直(まっすぐな)」のように、邵将区方言群以外では無声無気音で発音されるものが臨江方言ではすべて無声有気音で発音される。例えば「直」は the<sup>35</sup> である。山下方言では臨江方言ほど徹底はしていないけれども、やはりこの現象が観察される。この現象も上述の陽平甲>陽平乙の推移と同様の調類推移が全濁入声にも生じたと考えると理解可能になると思う。つまり「直」はまず声母の有声性が保たれる調類に変化するとともに声母も有声化し、しかる後、無声有気音に変化したと考えられる。「直」の声母は \*t > \*d > th と変化したのである。なお、この変化は観前方言には観察されない。

声調調値が他のびん北区方言と大きく異なっている点もこれら三方の特徴である。例えば陰平はびん北区方言では普通[53]のような高下り調であるが、これら三方では高平ら調[44]である。観前方言では陰去が高下り調[53]であるが、この調値もびん北区方言群としてはかなり異例である。普通は[33]のような中平ら調である。

(2) 水北街方言。この方言は石陂方言ときわめて近い関係にある方言であった。つまり、山下、臨江、観前三方言と比べて非常にオーソドックスなびん北区方言である。陽平甲と陽平乙の区別は明確で、「啼(泣く)」「頭」「糖」そして「爬(はう)」「銭(お金)」「茶」はすべて陽平甲に相当する陽平[33]で発音される。なおこの方言の上声の調値は[41]であり、びん北区方言における上声の一般的な調値[21]よりも発端部がかなり高い、下り調のはっきりした調値である。この調値は、びん北区方言群の古い段階の調値を保存したものである可能性が考えられよう。またこの方言の「臍(へそ)」の音形は注目に値する。その音形は tsh<sup>11</sup>(陰去)であり、「菜(おかず、

料理)」と同音である。この方言では陽平乙が陰去で発音される。「臍」はびん北区方言群において、例えば石陂方言 tsh<sup>33</sup> のように、声母は有気音、調類は陽平甲に相当する調類となる。水北街方言の「臍」の声母 tsh は他のびん北区方言と一致するが、調類は陽平乙相当であり一致しない。水北街方言でも陽平甲>陽平乙の推移が始まっていることを、「臍」の音形にみることは不可能ではないと思う。

(3) 楓溪方言。当初の計画では山下郷小溪村の方言を調査することになっていた。小溪方言は崇安方言の一変種であり、崇安方言のデータ蓄積が現状ではきわめて遅れているので調査の必要があると考えたからである。事情により小溪方言の調査ができなくなったため、それに代えて調査したのがこの楓溪方言である。現地の人々の印象通り、楓溪方言も、武夷山市城関の典型的崇安方言とはかなり隔たってはいるものの、崇安方言の一変種と認めうる方言であった。例えばびん北区方言で一般的に韻母 y をもつ「魚」「酔」「箸」「竹」などが au のように二重母音化する、「泉」「癩」「線(糸)」などが yaing という韻母をもつ、このような特徴は崇安方言の排他的特徴であるし、「泰」hua<sup>33</sup> のように \*th > h がおこり、しかもこの h が x と対立するのも(「泰」hua<sup>33</sup> 「化」xua<sup>33</sup>)崇安方言そして建陽方言の重要な音韻特徴である。この方言で興味深いのは、\*th > h がおこった一方で、tsh の閉鎖音化がまだ起こっていないことである。姓の「蔡」は tshua<sup>33</sup> であり、その声母は崇安方言や建陽方言のように th に変化していない。この点、崇安、建陽両方言よりも古い段階を保っている。また崇安方言では w に変化する声母が b という閉鎖音の音価を保つ点も明らかに古い。楓溪方言は崇安方言音韻史にきわめて重要な役割を果たす方言であると考えることができよう。

(4) まとめ。福建省最北端に位置する浦城県には、びん語と呉語の境界線が走っている。両側の方言差は中国でもっとも大きいといってもけっして過言ではない。本研究が研究対象としたのは、主としてまさにそのような境界地域に分布するびん北区方言であった。就中、山下、臨江、観前の三方言がきわめて特異な様相を呈していた。ここでこれらの方言のすぐ北に分布し、なおかつ浦城県では標準語的な地位を占めている浦城呉語の影響を考えたい。しかし、この三方言の特異性の由来はもっと大きな背景の下で考察する必要があることが、上の(1)でも触れた、邵将区方言群における平行した音韻変化からも明白であろう。そこに働いているメカニズムは、あるいはびん語音韻史の枠をこえ、中国語方言音韻史全般にも意味をもちうるものかもしれない。調査報告書『浦城県境内びん北区方言研究』(中国語)の完成を急ぐと

ともに、方言接触地帯における言語変化のメカニズムの解明に力を注いでいきたい。

愛媛大学・法文学部・教授  
研究者番号：10263964

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

〔雑誌論文〕(計1件)

秋谷 裕幸、びん北区浦城臨江方言和邵将区光澤寨里方言の古濁平声分化、『太田 斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』(太田 斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集刊行会編、好文出版) 査読なし、2013年3月15日、310-319頁

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：

〔学会発表〕(計3件)

秋谷 裕幸、浦城臨江方言古全濁入声読送気音の来歴、第13届びん方言国際学術研討会、2013年11月30日、泉州師範学院(中国)。

秋谷 裕幸、びん北区浦城臨江方言和邵将区光澤寨里方言の古濁平声分化、第九届台湾語言及其教学国際学術研討会、2012.10.5~10.6。台湾国立中央大学。

秋谷 裕幸、福建省浦城県臨江方言の音韻特徴、全国漢語方言学会第16届年会。2011年11月12日、福建師範大学(中国)。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

秋谷 裕幸 (AKITANI, Hiroyuki)